

独自の個性を切り拓き

文化力の新しい可能性を求め

芸術監督と首席指揮者を務めるイルミナートフィルハーモニーオーケストラを率いて、アジア初となるヴァチカン国際音楽祭に招聘された西本智実さんは、世界約30カ国の名門オーケストラなどで指揮者として活躍されています。多様な価値観の中で研ぎ澄まされた、芸術への情熱を伺いました。

オラシヨで結ばれた、 ヴァチカン国際音楽祭の喝采

ヨーロッパからアメリカ進出をきっかけに自身の先祖のことを考えるようになり、私のルーツは、長崎県の平戸にある生月島の潜伏キリシタンにも辿り着きます。様々な文化とともに「オラシヨ」というミサの歌が宣教師から伝えられました。「オラシヨ」は、ラテン語で祈りを意味します。キリスト教が禁教されて以降は、代々伝えられる歌声を真似て「オラシヨ」を覚えました。それは455年が過ぎた今も口伝されています。口伝された「オラ

シヨ」は3曲あり、音楽を通して言い伝える人間の力に、私は驚愕し感動しました。そして、ヴァチカンより招聘が決まり、打合せの席で初めて「オラシヨ」が今も遺っていることをヴァチカン側にお伝えしました。資料をお借りし突き合せていくと発音の変化も多少ありましたが、原曲に近いまま伝えられていましたので、サンピエトロ大聖堂のミサ中で復元演奏した時は、ヴァチカン側から「東洋の奇跡」という言葉を頂戴しました。450年以上脈々と紡がれて来たものが再びヴァチカンに戻った瞬間でした。自身を音楽を通じて捧げるといった感覚でした。

壁がなくなる世界になります。

本来、指揮者は論理的に説明する以外には自分の身体機能を使って音楽を表現しています。作品にもよりますが、私の場合リハーサルでは身体機能全体での指令は70%、論理的な説明は30%です。地図や設計図と言われる楽譜を基に、指揮者はオーケストラと旅をし、聴衆を伴い大海原を航海します。目に見えない旅の中を演奏者の体調、会場の広さ、天候など、様々な要因を微妙に調整し続けます。

オーケストラのメンバーは、各楽器のスペシャリストです。様々な楽器の音楽が重なり、集まり、大きな一つの音楽を作ります。重なり方の組み合わせを変えれば、また違った景色が見えてきます。何を生かすのか、指揮者が預かるものはとつともなく重責だと年々感じています。

各自の特色を、 最大限に発揮する

オーケストラも1000人いたら1000色です。黄金色、いぶし銀、力強い、重厚、言葉だけでは決して表す事が出来ません。同じ楽器の同じ音でも、演奏者の個性がにじみ出る微妙に異なる音の重なりがオーケストラの魅力になります。私は、演奏者の個性がより生き生きしたものになるよう努めたいとも思っています。私が監督するイルミナートフィルでは20歳代、70歳越えの演奏者が在籍しています。

Nishimoto Tomomi

イルミナート芸術監督兼首席指揮者、ロイヤルチェンバーオーケストラ音楽監督兼首席指揮者、日本フィルミュージックパートナー。岸和田市立浪切ホール芸術ディレクター。大阪音楽大学客員教授。松本歯科大学名誉博士。平戸名誉大使第1号。大阪国際文化大使第1号。名門ロシア国立響及び国立歌劇場で指揮者ポストを外国人で初めて歴任、約30ヶ国より指揮者として招聘。2013年よりヴァチカン国際音楽祭に毎年招聘、2014年ヴァチカンの音楽財団より【名誉賞】が最年少で授与。2015年エルマウ・2016年伊勢志摩G7サミットの日本国CM及び日本国政府公式英文広報誌に国際的に活躍している日本人として起用。2007年ダボス会議のヤンググローバルリーダーに選出。アメリカの3つの財団から奨学金給付を受け、ハーバード大学大学院(ケネディスクール)「エグゼクティブ教育」修了。BSジャパン「ミステリアス・ジャパン」(毎週木曜日17:29~放送)のナビゲーター、音楽・指揮を務めている。NHKラジオ第一「NHKマイあさラジオ「サタデーエッセー」」レギュラーゲスト。



指揮者

西本智実さん

文化力で世界と繋がる

ヴァチカンでの経験は、再び私の情熱を高めてくれました。文化の異なる人々と接することで、もっと本質に近づきたいと思っています。例えば、今年のイルミナートフィルとのベートーヴェン作曲の『交響曲第7番イ長調Op.92』は、作品に内包されているイスラム的な要素を全面に出した演奏を目指しました。

モーツァルトの時代には、トルコをはじめとする西アジア地域から異文化がどんどん流入し、それが庶民レベルで受け入れられファッションや食を中心に大流行していました。いかにもドイツの代表と思われるベートーヴェンの交響曲も少なからずイスラム文化の影響を受けています。そのような時代の背景に着目していくと、ヨーロッパ文化は様々な文化が接木のように繋がって発

展していった様が私の中で浮き上がってきました。

また、ロシアの詩人R.ガムザートの詩に、Y.フレンケリが作曲したロシアの流行歌『鶴』に日本語詞を付け、オーケストラレーシヨンを発表しました。詩人R.ガムザートが日本への原爆投下で亡くなられ傷ついた人々への鎮魂のために書かれた詩と知り、当初、2010年の暮れ頃に日本語詞にし翌年に発表する予定でした。ところが2011年の東日本大震災で、私自身もどうしても言葉にすることができなくなりました。

あつてはならない原爆の投下や、起きるとは思っていない大きな災害は、世界中の誰もが簡単に割り切れることではありません。しかし、人は苦難を乗り越える力も持っていると感じたい。私自身は文化力を通じて出来る事をしていこうと音楽活動をしています。今年、『鶴』の日本語詞を完成させ、さだまさし氏によるソロとイルミナートフィル&イルミナート合唱団によりオーチャードホールとザ・シンフォニーホールで発表しました。

指揮者独自の航海図を 完成させる

世界中で指揮をしていると、言葉で言い表すことの難しさを実感します。ただ、ある一線を越えた瞬間に、言葉よりも強いコミュニケーションが生まれ、言語の



サンピエトロ大聖堂での
ローマ教皇代理ミサでの様子